昭和38年度

# 京都大学アフリカ学術調査隊

# 計　画　書

1963

Kyoto University

# 昭和38年度

# 京都大学アフリカ学術調査隊

本計画は昭和36年度，同37年度の二ケ年にわたつてすでに実施され，現在なお継続中であるアフリカ学術調査の成果をさらに拡充し，総合するために立案されたものである。

世界平和に関与すべき一大新興勢力としてアフリカの発展はいまや万人の注目をあつめつつあるが，いつぽうでは人類誕生の地としてもまた，アフリカは学界における注視の的となつている。すなわち1924年，南アフリカにおけるR.ダートのオーストラロピテクス，1959年，東アフリカにおける L. S. B. リーキーのジンジャントロープスの発見等は，人類誕生の謎をめぐり，あらたにいくつかの課題を提出するに至つたのである。

われわれはこうした課題を解くための方法として，人類誕生の場と考えられる東アフリカのサバンナをえらび，ひとつは現存する類人猿の社会生活を明らかにすることにより，いまひとつは，いまなお原始的な狩猟採集生活を営む原住民の社会生活を調べることによつて，何十万年かの昔に人類の祖先がたどつた経路を，復元しようと試みるものである。

類人猿については，過去10年余にわたる野生ニホンザルの生態学的社会学的研究の上に立つて，1958年（昭33）以来，すでに三回わたる野生ゴリラの調査を行い，1961年（昭36）からは，サバンナのチンパンヂーに研究の目標をおいて，その餌づけによる長期観察のため，タンガニイカ湖畔に半永久的な基地を建設した。現在，現地にある隊員の報告によれば，本年の乾期中に餌づけをおわり，個体識別にもとずく本格的な観察の段階にすすみうる公算が高い。

いつぽう昭和36年度以来，エヤシ湖畔に基地を設けた人類班は，医療活動を通じて，狩猟採集民の生活，分布，移動の範囲などについてすでに多大の資料をえた。本年度においては，まず人類班（診療班をふくむ）を増員強化することにより，これら狩猟採集民と，これをとりまく遊牧民ならびに農耕民との関係を把握することによつて，この調査を完了せしめたい。



Kyoto University

本年度以降もひきつづき継続観察を必要とする類人猿班に対しては，本年度後半において調査員の交代を行う。

本年度計画にはこのほか学術資料映画を撮影する計画が含まれている。われわれの調査を資料映画として保存することの必要はいうまでもないが，同時に，民族独立の波にのつて変貌しつつあるアフリカを，現在の時点において撮影しておくことは，歴史資料としての価値を考えるとき，当然本調査隊に課せられた任務の一つでなければならないからである。

なお本年度までの調査成果については別冊中間報告を参照されたい。

# 計　画　内　容

## Ⅰ 編　成

**隊　長**

今　西　錦　司　　京都大学人文科学研究所教授

隊　員

**類 人 猿 班**

伊　谷　純一郎　　京都大学理学部助教授（後期出発）
藤　岡　喜　愛　　京都大学人文科学研究所助手（後期出発）
東　　滋　　大阪市立大学理学部大学院（現地調査中）
豊　嶋　顕　達　　京都大学理学部大学院修士課程（現地調査中）
端　　信　行　　京都大学文学部二回生

**人　類　班**

梅　棹　忠　夫　　大阪市立大学理学部助教授
富　川　盛　道　　北海道大学文学部助手（現地調査中）
富　田　浩　造　　北海道大学文学部大学院修士課程（現地調査中）
和　崎　洋　一　　京都大学人文科学研究所研究員
谷　口　　穣　　京都大学文学部二回生

**診　療　班**

浅　井　東　一　　大阪浪速病院長

**撮　影　班**

河　端　　繁
小　泉　隆　三
村　上　　進



## Ⅱ 行　動　概　要

1. 4月1日
   先発隊（端，谷口）大阪商船「九州丸」にて神戸出発。貨物を携行する。モンバサに向う。エヤシ基地，カボゴ基地に先行。
2. 5月1日
   和崎隊員，撮影班（河端，小泉，村上）とともに羽田発。まずエヤシ基地周辺にて予察調査ならびに撮影開始。
3. 6月1日
   本隊（今西，浅井，梅棹）羽田発　スワヒリ語習得のため全員モシに集結。
4. 7月15日
   以降，隊員はカボゴ基地，エヤシ基地に分散して，夫々調査，ならびに撮影に従事する。
5. 10月1日
   後発隊（伊谷，藤田）羽田発。カボゴ基地，及びエヤシ基地の人員交替。
6. 10月31日
   先発，本隊，撮影班全員羽田帰着。

## Ⅲ 経　　費

| | |
|---|---|
| 旅　　費 | 4445,000円 |
| 現地滞在費 | 8624,700円 |
| 国内準備費 | 7703,000円 |
| 装　備　費 | 2425,000円 |
| 通信運搬費 | 1742,000円 |
| 保　険　料 | 110,000円 |
| 雑　　費 | 824,000円 |
| | 25873,700円 |

## Ⅳ 隊 員 略 歴

38年度派遣隊員

今　西　錦　司　(61才)

昭和3年，京都大学農学部卒。理博。生態学，人類学。
京都大学人文科学研究所教授。同理学部教授，
昭和13～14,19～20年内蒙古，
昭和17年大興安領，
昭和27年ネパール，
昭和30年カラコルム，
昭和33,36～37年アフリカの調査に従事。



Kyoto University

浅　井　東　一　（61才）

昭和４年，京都大学医学部卒。医博。熱帯医学。
大阪浪速病院長。
昭和13～14年内蒙古，
昭和17～18年東南アジアにおいて医療活動，
昭和37年ベトナム視察。

梅　棹　忠　夫　（43才）

昭和18年，京都大学理学部卒。理博。生態学，人類学。
大阪市立大学理工学部助教授
昭和16年ミクロネシア，
昭和17年大興安嶺，
昭和19～20年内蒙古，
昭和30年カラコルム，
昭和32～33,36年東南アジアにおいて学術調査に従事。

伊　谷　純一郎　（36才）

昭和26年京都大学理学部卒。理博。人類学，霊長類学。
京都大学理学助教授。
昭和26年以後，野生ニホンザルの調査，
昭和33,35,36年，アフリカにおいて類人猿調査に従事。

藤　岡　喜　愛　（38才）

昭和22年，京都大学理学部卒。人類学，社会心理学。
京都大学人文科学研究所助手。
昭和32～33タイ，
昭和35年トンガ列島において調査に従事。

和　崎　洋　一　（43才）

昭和20年，京都大学理学部卒。社会人類学。
京都大学人文科学研究所研究員。
ロンド株式会社代表取締役。
昭和19年内蒙古，
昭和23,29年日本の農村調査に従事。

谷　口　　穣　（25才）

京都大学文学部学生（２回生）
京都大学探検部々員。

端　　信　行　（21才）

京都大学文学部学生（２回生）
京都大学探検部々員。

河　端　　繁　（29才）

昭和30年東京写真大学卒。
日本映画技術協会会員。
昭昭30年以後，自然科学記録映画製作に従事。
作品〝昆虫の生態〟（受賞作品）他多数。



小　泉　隆　三　（27才）

昭和30年京都府立山城高等学校卒。
関西映画社撮影部。
昭和30年以後，記録映画製作所に従事。
作品〝倉敷紡〟他多数。

村　上　　進　（38才）

昭和21年，同志社大学文学部中退。
独立プロ，ハイスピリット・プロモーション。
作品〝素浪人罷り通る〟〝女の一生〟他多数。

## 現地調査中の隊員

富　川　盛　道　（39才）

昭和27年北海道大学文学部卒。医博。社会人類学。
北海道大学文学部助手。
昭和25年以降，北海道アイヌ民族の調査に従事。

富　田　浩　造　（29才）

北海道大学文学部大学院修士課程。
社会人類学。

東　　滋　（27才）

大阪市立大学理学部大学院学生。
博士課程。動物社会学。

豊　嶋　顕　達　（24才）

京都大学理学部大学院修士課程。
自然人類学。

## Ⅴ　来年度以後の計画

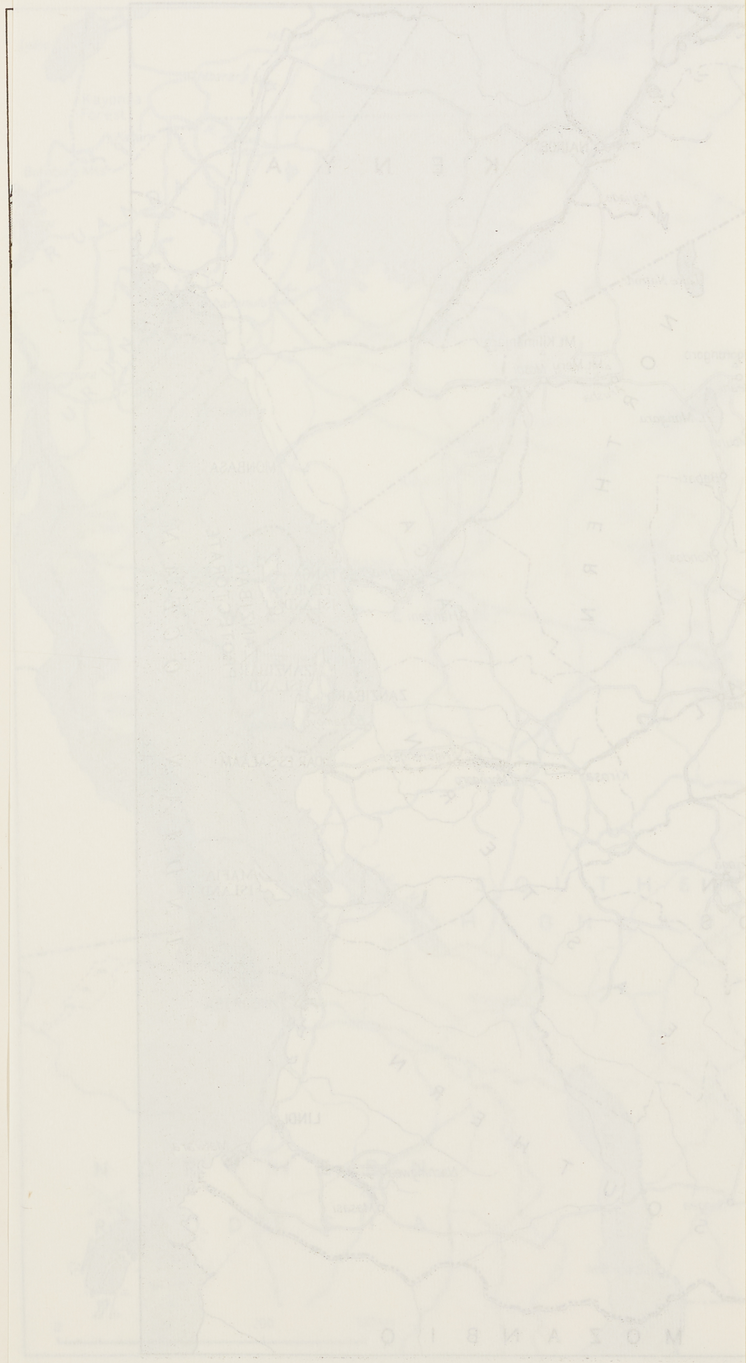
本計画は研究の性質上，長期にわたつて行う必要がある。特にチンパンジーの餌づけによる類人猿班の長期観察は，本年度以降も隊員を適宜交代させて継続する。また，医療班は将来独立に恒久施設をつくつてその活動を続ける予定である。人類班及び撮影班は，一応その成果を整理検討の上，あらためて計画をたてる。

### 連　絡　場　所

昭和38年度京都大学アフリカ学術調査隊
事務局
京都市左京区吉田　京都大学人文科学研究所分館
電話 ㊼ 4111
学内 956（分館受付）
962（今西研究室）



Kyoto University



Kyoto University




TANGANYIKA TERRITORY

Kyoto University




Kyoto University

Kyoto University

昭和三十六年度において京都大学アフリカ類人猿学術調査隊を東アフリカ・タンガニーカ国へ派遣するに当りましては、格別な御高配を忝うし、有難く厚く御礼申上げます。御蔭をもちまして調査隊は目下なお現地にあつて着々と調査研究を進めております。この度いままでの成果の概要を一応「中間報告」として纏めましたから、御高覧いただきますならば幸いに存じます。

この調査は発足のはじめから相当長期にわたつて継続することを予想し、そのため現地に半恒久的な基地まで建設したのでありましたが、ただいままでの成果を慎重考慮致しました結果、昭和三十八年度以降もこの調査を続行することによつて、さらに成果の充実と確立を期待したいと存じ、「中間報告」とともに、新たに立案致しました「昭和三十八年度京都大学アフリカ学術調査計画書」をお届け致しました。

調査隊は、本年度国費の支給をうけることになつております。類人猿班並びに人類班隊員を中心として、これに本学学内団体「京都大学アフリカ研究会」の会員中から若干の有志を加え、さらに撮影班を伴ないますが、これは学術資料映画を作製し、現地における調査の進行状態を記録するとともに、目下急速に変貌をとげつつあるアフリカ

Kyoto University

人社会の実態を紹介せんがためであります。

ここに御挨拶をかねて、引きつづき関係各官庁並びに財界各位の御協力御支援を切に御願い致す次第でございます。

昭和三十八年三月一日

財団法人京都理学研究所理事長　平沢興

京都大学アフリカ類人猿学術調査委員会委員長

京都大学総長　桑原武夫

京都大学アフリカ類人猿学術調査委員会副委員長

京都大学人文科学研究所長　今西錦司

京都大学アフリカ類人猿学術調査隊長

京都大学アフリカ研究会会長

京都大学人文科学研究所教授

兼理学部教授

Kyoto University